

「お前が最近巷を荒らす蜘蛛の妖怪の親玉か」

私は目の前の巨大蜘蛛に刀を向けた。最近巷では小さい蜘蛛の妖怪に取り憑かれた人間が人を襲う事件が多発していた。小さな蜘蛛を祓い続けていても大元を叩かなければ埒があかない。時間はかかったがようやく親玉の居場所を突き止め、ここまで追い詰めたのだ。

「人々の安寧をおびやかすものよ、ここで朽ち果てるがいい！」

渾身の力を込めて術を放とうとする。しかしそれは寸前で止められた。私の目の前に蜘蛛糸で全身を絡め取られた少女たちが現れたからだ。

「くっ……卑劣な」

「心優しい退魔師さんは、何の罪もない女の子を攻撃したりできないよね？」

和服を着た金の瞳の男がにたりと笑う。彼が蜘蛛の妖怪の親玉だ。人の生命力を奪い、力を蓄え、人の姿をとることができるようになったのだ。

「その子達を放しなさい！」

「これでも貴重な食糧なんだよ。ほら」

一人の少女の足の付け根に蜘蛛糸が伸びる。それは少女の陰核に絡みつき、激しく動き始めた。

「いやああああっ！♡あんっ♡ああっ♡」

少女は悲鳴のような嬌声をあげて潮を撒き散らす。小さな蜘蛛たちがそれに群がるのを見て私は唇を噛んだ。

「何てことを……」

「まあでもそろそろ解放してあげてもいいかな。ただし君が代わりになってくれるらだけど」

「誰がそんな……！」

「へえ、そう。じゃあどうしようかな……」

男が言うと、少女を捕らえている蜘蛛糸を辿って黒く巨大な蜘蛛が降りてくる。黒い蜘蛛は少女の体に覆い被さると、その口を少女の秘部に近付ける。

「いやっ！ それだけはっ……！」

何をされるか悟った少女が叫ぶ。私は少女を傷つけないように札を放ち黒い蜘蛛を祓った。

「止めても無駄だよ。蜘蛛はまだたくさんいるからね。君があくまで身代わりにならないって言うなら、もっとたくさん蜘蛛にこの子達を襲わせるよ。そうしたらどうなるか……わかるよね？」

「くっ……」

蜘蛛に襲われた人の中には、蜘蛛に精子を注がれて異形を産んでしまった人もい

た。その人がどうなったのかは私も知っている。

「……わかったわ。身代わりになるから、その子たちは解放して」

一般の人たちを見殺しにするわけにはいかず、私はそう言った。けれど必ず隙を見てこの蜘蛛の親玉を倒す。私が乗り込んだことは仲間の退魔師たちも知っている。そのうち救援も来るだろう。それまでは耐えればいい。

しかしそれが甘い考えであることを私はすぐに思い知るのだった。

\*\*\*

「くっ……」

私は少女たちと同じように蜘蛛の巣に囚われた。糸は粘着性があり、細いのにつきり手首や足首を締め付けるので身動きができない。

「そういえば自己紹介していなかったね。僕の名前は紗さえい環だ」

「人の世に仇なすものの名前を覚える気はない」

「またまたあ、名前が大事なのは退魔師ならわかるでしょ？ だから君の名前は聞かないで置いてあげるね」

紗環にはずいぶん余裕があるようだ。名前があれば使える術があることも知って

いる上に、その上で名前を教えても問題ないと思っっているのだ。

「舐められたものね」

「君のようなひよつ子にこの僕が倒されるわけないじゃないか。ねえ？」

紗璽は私の耳元でそう囁く。耳にふーっと息を吹きかけられて体がびくりと反応してしまった。

「耳弱いのか？ それならここからいこうか」

紗璽は笑いながらも一度私の耳に息を吹きかける。そして軽く耳朶を噛んでから私の耳の中に舌を入れた。ちゅぷちゅぷという水音が直接頭に響いてゾワゾワとした気持ちよさに襲われる。

「ひうつ……！」

思わず声を漏らすと紗璽は満足そうに笑った。私は歯を食いしばってなんとか耐えようとするが、紗璽の舌は執拗に私の耳を犯し続ける。

「どうしたの？ 顔が赤くなってきたみたいだけど」

「うるさい……！」

「まだ始まったばかりなのに。この調子で大丈夫かな」

紗璽は今度は逆の耳に息を吹きかけた。そしてそのまま口づけをする。舌を入れられると私はまた声が出てしまった。それから左右交互に同じことを繰り返し返され

る。

「んっ……ふっ……」

必死に声を押し殺す。紗環は執拗に私の耳を舐め続けた。その度に体がびくびく震えてしまう。私は屈辱と快感で涙が出そうになった。しかしそこで紗環の舌が止まる。私は不審に思っつて紗環の方を見る。すると紗環は楽しそうな表情を浮かべていた。

「耳だけでこんなになつてちやこの先どうなるかな？」

「っ……」

悔しいけれど言い返せない。耳だけでも十分すぎるほど感じていたからだ。しかしこんなことで負けるわけにはいかない。私は紗環を睨みつける。紗環はそんな私を見てにやりと笑った。そしてまた私の耳元に顔を寄せてくる。

「じゃあ次はこっちの耳ね」

紗環の舌が私の耳を侵食していく。耳の奥まで入り込んでくる感覚に背筋がぞくぞくする。私は体を震わせて声を押し殺した。

「可愛いなあ。そんなに我慢してさ」

紗環は私の耳を甘噛みしながら言った。私は歯を食い縛つて必死に耐える。しかし紗環は構わず私の耳を愛撫し続けた。耳たぶを舐められたり甘噛みされたりする

うちにだんだん力が抜けてくる。口を開けば喘ぎ声が出てきそうだ。私はギュツと目を閉じた。

「もう限界？」

「まだ大丈夫……っ！」

私は強がりと言ったが、紗瓔にはバレているようだった。紗瓔はクスリと笑うと耳穴に舌を突っ込んでくる。ぬるぬるとした感触が気持ちいい。私は思わず声を漏らしてしまいそうになるがなんとか堪えた。紗瓔はしばらく私の耳を弄んでいたがやがて舌を抜いた。

「あーあ、こんなに濡らしちゃって」

紗瓔は私の股間に手を伸ばした。下着越しにも湿っているのがわかるくらいになっていた。私は羞恥心で顔が熱くなる。紗瓔はそれを嘲笑うように言った。

「まだ耳だけでこんなになってるなんて淫乱だねえ」

「誰がっ……！」

「否定する必要はないでしょ。ここは素直になってるみたいだし」

紗瓔は私の割れ目を指でなぞった。敏感なところに触れられて腰が跳ねる。私は唇を噛んで耐えようとするが効果はないようだった。紗瓔は執拗に同じ場所を責め立てる。そのたびに電流のような刺激が走って頭がおかしくなりそうだった。

「はあっ……はっ……はっ……」

荒い呼吸を繰り返しながらなんとか耐えようとする。しかし紗瓔の攻撃は止まらない。下着の上から割れ目をなぞられ続けると徐々に思考能力が低下していく。もう何も考えられない。ただ気持ちいいという感情だけが残っている。紗瓔は私の反応を楽しむように何度も割れ目を擦ってきた。その度に体が反応してしまう。

「そんなに気持ちいい？」

「ちがつ……んんっ！」

私は否定しようとしたがその言葉は途中で遮られた。紗瓔は蜘蛛の糸を伸ばし、器用に下着を脱がせていく。私は慌てて足を閉じようとしたが拘束されているためできなかった。

「随分と綺麗な色してるんだね」

紗瓔はそう言いながら私のクリトリスに触れた。そこはもうすっかり勃起していて触れられただけで声が出そうになる。しかし私は歯を食いしばって耐えた。紗瓔は不満げな顔をしたがそれ以上は何も言わなかった。

「ここもすごく硬くなってるね。触ってほしいんじゃない？」

紗瓔はそう言って蜘蛛の糸をクリトリスに巻きつける。そしてそのままゆつくりと引っ張り始めた。最初は優しく触れられるだけだったのに徐々に強く絞めつけら

れるようになる。私は声を抑えきれずに喘いでしまった。

「はあっ……んっ……♡」

紗璽は楽しそうな笑みを浮かべるとさらに糸をきつく締める。痛いくらいの刺激に私は身悶えることしかできなかった。

「どうしたの？ 苦しい？」

紗璽はわざとらしく聞いてくる。私は首を横に振って否定した。本当は苦しかったが認めたくないという気持ちの方が強かったのだ。しかし紗璽はその答えが気に入らなかったらしくクリトリスを更に強く締め上げてきた。あまりの痛みに涙が出そうになる。紗璽はそれでも構わず糸を引っ張り続けた。私はついに我慢できなくなつて叫んでしまう。

「痛いっ！」

紗璽はそこでようやく手を止めた。そして満足そうに笑うと糸を緩めてくれた。私は安堵のため息をつく。すると紗璽が耳元で囁いた。

「痛かった？」

紗璽の言葉を聞いて恥ずかしくなる。私は何も言わずに目を逸らした。紗璽はそんな私を見て楽しそうに笑っている。私は屈辱で顔が熱くなった。

「じゃあ今度は気持ちよくしてあげる」



紗瓔はそう言って再び糸をクリトリスに巻き付ける。そしてそのまま糸を細かく振動させ始めた。私はその刺激に耐えられず声を上げてしまった。紗瓔はそれに気をよくしたようでクリトリスをしごくように上下に動かされた。

「ひうつ……！♡あっ！♡あああっ！！♡」

私は激しい快感に襲われて体を仰け反らせる。紗瓔はそんな私の反応を見て嬉しそうに笑っていた。私はなんとか声を抑えようと歯を食いしばる。しかし紗瓔は執拗に同じ場所を責め立ててきた。紗瓔は私の反応を楽しんでいるようだった。クリトリスが痺れるような快感に襲われる。私は体を震わせながら絶頂を迎えそうになるが寸前のところで刺激を止められた。

私は物足りなさを感じて紗瓔を見る。すると紗瓔は妖艶な笑みを浮かべながら言った。

「どうしたの？ イキたい？」

私は首を横に振る。まだ快楽に堕ちるわけにはいかない。すると紗瓔は残念そうな顔をした。そして私に顔を近づけると言った。

「まあ君の希望なんて聞くつもりないけどね」

紗瓔はそう言ってクリトリスに巻きつけた糸を強く引いた。その瞬間凄まじい快感が襲ってきて頭が真っ白になる。私は大きく仰け反って絶頂を迎えた。あまりに

も強い快感に頭が痺れるような感覚があつた。

「はあ……はあ……」

呼吸を整えようとするがうまくいかない。体中に痺れるような感覚が残っていて動けない状態だった。紗璽はそんな私を見て満足そうな笑みを浮かべる。

「可愛い声で鳴くんだね。もっと聞きたいな」

紗璽はそう言つてまたクリトリスを刺激し始める。私は再び襲つてくる快感に身悶えた。

「はあっ……はっ……」

快楽から逃れようと体を動かそうとするがうまくいかない。紗璽はそんな私を見て笑つていた。そして私の耳元に顔を近づけ囁くように言う。

「気持ちいい？ 気持ちいいよね？」

「っ……！」

紗璽の言葉を聞いているだけで頭が蕩けてしまいそうになる。私は必死に耐えようとしたが紗璽は容赦なくクリトリスを責め立ててきた。

「ああっ！♡ああああああっ!!♡」

私は激しい快感に襲われて再び絶頂を迎える。頭が真っ白になり思考能力が低下していく。体中がビクビクと痙攣し制御が効かない。私は荒い呼吸を繰り返しながら

らなんとか意識を保っていた。

「ほらもつと聞かせて」

紗璽はそう言うのとクリトリスへの攻撃を再開する。私はその刺激に耐えきれず喘いでしまった。

「はあっ……んっ……！」

紗璽は私の反応を見て楽しそうに笑うとさらに強くクリトリスを刺激してきた。私は再び襲ってくる快感に体を仰け反らせる。紗璽はそれを見て笑うと、今度は乳首にも糸を巻きつけた。そしてクリトリスと同じように激しく刺激され私は悲鳴を上げる。しかし紗璽は手を止めることなくクリトリスと乳首を同時に責め立ててきた。

「はあっ……♡あっ！♡あっ！！♡」

私は激しい快感に襲われて体を仰け反らせる。紗璽はそんな私の反応を見て楽しそうに笑っていた。私はなんとか声を抑えようと歯を食いしぼる。しかし紗璽は執拗に同じ場所を責め立ててきた。私はもう限界だった。頭が真っ白になり体が痙攣し始める。紗璽はそんな私を見て笑うとクリトリスに巻き付けた糸を強く引いた。その瞬間凄まじい快楽に襲われる。

「はあ……はあ……」

呼吸を整えようとするがうまくいかない。体中に痺れるような感覚が残っている。動けない状態だった。紗璽はそんな私を見て満足そうな笑みを浮かべる。

「気持ちよかった？ 次はどうしてほしい？」

紗璽はそう言いながら私のクリトリスに触れる。私はその刺激に体を震わせた。

「んっ……！」

私は反射的に声を上げてしまう。紗璽はそれを聞いて嬉しそうに笑うとクリトリスを強く摘み上げた。そしてそのまま糸でクリトリスを擦るように動かす。

「ひゃうっ!?♡あああっ!!♡」

私は激しい快感に襲われて体を仰け反らせる。紗璽はそんな私を見て満足そうに笑うと更に強くクリトリスを責め立ててきた。私はもう限界だった。頭が真っ白になり体が痙攣し始める。紗璽はそんな私を見て笑うとクリトリスを強く抓り上げた。

「はあっ……んっ……♡」

私はその刺激に体を仰け反らせる。紗璽はそんな私を見て楽しそうに笑っていた。私はなんとか声を抑えようと歯を食いしばる。しかし紗璽は執拗に同じ場所を責め立ててきた。

「はあっ……んっ……！」

「じゃあそろそろ、こっちも」

紗環が私の秘部に指を伸ばす。秘裂を軽く撫でられるだけでくちゅ、と水音が響いた。

「もうぐちゃぐちゃになつてゐるね。ほら、僕の指を簡単に飲み込んでいく」

紗環は私の秘部に一本指を入れた。私は思わず声を上げてしまふ。紗環はそれを聞いて楽しそうに笑つていた。

「まだ一本だけなのにすごい反応だね。そんなに気持ちいい？」

私は首を横に振る。まだ快楽に堕ちるわけにはいかない。すると紗環は残念そうな顔をした。そして私に顔を近づけると言つた。

「まあ君がどう思つていようと僕には関係ないんだけど」

紗環はそう言う私の膣内に挿れた指をゆつくりと動かす始める。私はその刺激に思わず声を上げてしまった。紗環は私の反応を見て嬉しそうに笑う。そしてさらに激しく指を動かす始めた。私は必死に声を抑えるがどうしても漏れ出してしまふ。紗環はそんな私を見て言つた。

「我慢しなくてもいいんだよ？　ここには僕たちしかいないんだから」

紗環はそう言つて私の秘部を責め続ける。私は必死に声を抑えていたが限界だつた。頭が真っ白になり体が痙攣し始める。紗環はさらに強く指を動かした。その瞬間、強烈な快感が襲つてきて頭が真っ白になる。私は大きく仰け反つて絶頂を迎え

た。頭が真っ白になり思考能力が低下していく。体中がビクビクと痙攣し制御が効かない。私は荒い呼吸を繰り返しながらなんとか意識を保っていた。

「はあ……はあ……」

紗璽はそんな私を見て満足そうな笑みを浮かべる。

「気持ちよかった？ 次はどうしてほしい？」

紗璽はそう言いながら私の耳を舐めた。ぴちやぴちやという音に耳を侵される。

「んっ……！♡」

私は反射的に声を上げてしまう。紗璽はそれを聞いて嬉しそうに笑うと私の耳の中に蜘蛛糸を入れ始めた。

「な……何を……っ」

「ここから君の頭の中に入り込もうかなって思っ」

「なっ……！」

「僕たちがどうやって人間を操ってたか知ってる？ こうやって人間の頭に糸を伸ばして、それを神経の一本一本に絡めていくんだ」

紗璽の言葉を聞いてぞっとした。つまりこのままでは私は蜘蛛に操られるということになる。私はなんとか抵抗しようとするが体に力が入らない。紗璽はそんな私を見て満足そうに笑っていた。

「無駄だよ。もう君の頭の中に僕の糸が入り込んでる」

紗環はそう言うのと再び私の耳に舌を入れた。耳の中を犯される感覚に背筋がぞくぞくする。私は歯を食い縛ってなんとか耐えようとするが効果はないようだった。紗環は執拗に同じ場所を責め立ててくる。そのたびに電流のような刺激が走って頭がおかしくなりそうだった。

「あっ……！♡」

紗環が私から離れていく。同時に私の体はこれまで拘束されていた蜘蛛の巣から解放された。しかし自由になったはずの体が全く動かせない。

「動こうとしても無駄だよ。君の体の自由は僕が握ってるんだ」

紗環が指を動かす。同時に私の手が勝手に動き、私の胸を揉み始めた。私は驚いて声を上げる。

「いやっ!? なんで!?」

「自分の手で沢山気持ちよくなるといいよ」

紗環はそう言って笑った。私は必死に抵抗しようとするが体が言うことを聞かない。両手を使って胸を揉むように動かされる。自分で自分を愛撫するのは初めての経験だった。他人に触られるよりも何倍も恥ずかしい。紗環は私の反応を見て楽しそうに笑っていた。

「乳首も弄ってあげない」と

紗嚢はそう言うと言を動かす。すると私の手も同じように動き始めた。両方の乳首を摘まみ上げられると痺れるような快感に襲われる。私は思わず声を漏らしてしまう。紗嚢はそれを見て満足そうに笑うとさらに強く乳首を摘まんできた。私は必死に声を抑えるがどうしても漏れ出てしまう。紗嚢はそんな私を見て言った。

「君の恥ずかしいところ、みんなに見てもらおうか」

紗嚢が言った瞬間、彼の後ろに無数の霊が現れた。私は彼らの姿に見覚えがあった。この蜘蛛が現れてから犠牲になってしまった人と、蜘蛛に操られた人たちだ。一部は亡霊だが、生霊も混ざっている。

「この糸は魂にも絡みつく。みんな僕の手駒になったんだよ」

「そんな……っ」

「ほら、君の姿を見てもらいなよ。みんなを助けられなかった哀れな退魔師の姿をさ」

霊の中には先ほどの少女たちもいた。生霊だから死んではいけない。しかし既に紗嚢に魂を囚われてしまっていたのだ。私は彼女たちの代わりになったつもりで、彼女たちを助けられてなどいなかったのだ。

「ほら、足も広げて」



「んっ……！」

私の足が勝手に広がり、秘所を曝け出す。濡れた恥丘が露になった。私は必死に足を閉じようとしたが体が動かない。

「恥ずかしい？　でも仕方ないよね。だって僕の糸は頭の中まで入っちゃったんだもん」

紗璽はそう言うのと笑った。私は悔しさに唇を噛む。紗璽は私の耳元で囁いた。

「君の体はもう僕のものなんだよ。ほら」

私の手が勝手に秘部に伸びていく。そして指を秘裂へと挿し入れた。

「ふあっ!？」

紗璽は満足そうに笑うと私の耳を甘噛みする。そして耳の中に舌を這わせてきた。私はゾクツとした感覚に襲われる。紗璽はそれを見て楽しそうに笑った。

「ここ、好きなんだ？」

私の指が敏感な場所を擦り、ビクンツと腰が揺れた。紗璽はそれを見てニヤリと笑う。

「ああっ！♡」

「可愛い声で鳴くね。もっと激しくいじってみてよ」

自分自身の指で膣内を掻き回される。激しい動きに溢れた蜜が飛び散るのが見え

た。

「あんっ♡ああ……っ！♡」

「ほら、みんなが見てるよ」

紗瓔の言葉に私ははっとした。霊たちの目は私に注がれている。見られたくないのに手は止まらない。

「いやっ！ 見ないで……！ ああんっ♡」

「見ないでって言ってるわりには気持ちよさそうだね？」

「こ、これはあなたが……っ、いや、っああっ、イツちゃう♡♡」

私は潮を撒き散らしながら果てた。その醜態を霊たちが見下ろしている。しかし紗瓔はそれでは終わらせてくれなかった。紗瓔は蜘蛛の糸を張り、私の秘部を広げて霊たちに向けて晒す。そして溢れていた蜜を一旦拭き取った。

「ほら、まだみんなに見てもらいなよ。自分がどれだけ淫乱なのかをさ」

紗瓔が囁くと、私の手が再び胸に伸びる。触れたくはないのに指が勝手にピンと立った乳首をこねくり回してしまふ。

「あっ♡あっ♡やめて……っ！♡」

「本当にやめていいの？ だってほら、さっき綺麗にしたのにどんどん溢れてくるよ？」

蜘蛛の糸で広げられた膣口から愛液が溢れる。霊たちの視線はその場所に注がれていた。

「やだ……見ないで……っ」

「あーあ、泣いちゃった。でも大丈夫。何も考えられなくしてあげる」

紗璽は再び私のクリトリスに糸を巻きつけた。そしてその糸を使ってクリトリスを擦り上げる。私は悲鳴のような嬌声をあげることしかできなかった。

「ああっ♡いやあああっ！イクうううううう♡！」

秘部から勢いよく潮が吹き出し、地面を濡らしていく。ひくひく動いている膣口を見られながら、私は痙攣することしかできなくなってしまった。

「そろそろいいかな。僕の子を孕ませてあげる」

「え……」

「安心してよ。人間の子供を産むよりずっと楽だし、何もわからなくなるくらい気持ちいいからさ」

「い、いやっ！絶対嫌っ！」

私は必死に体をよじる。しかし紗璽はそんな私を見て笑うと屹立する男の象徴を私に見せつけた。それはあまりにも大きくて、そんなものが自分の中に入るとはとも思えなかった。

「無駄だよ。君はもう僕のものなんだから」

再び蜘蛛糸で体を拘束される。体を動かせなくなった私の秘部に紗璦は自分のものを当てた。

「ほら、君の中に入っていくよ」

紗璦のものが私の中に挿入される。膣壁が押し広げられ、異物が侵入してくる感覚があった。

「痛いっ！」

「そのうち気持ち良くなるよ」

紗璦はそう言うと言をさらに奥へと進める。痛みには耐えていると突然紗璦の動きが止まった。紗璦は嬉しそうに笑うと私に囁いた。

「君の膣内が僕に絡み付いてくるよ」

「うそ……っ」

「本当だよ。ほら」

紗璦はそう言ってさらに奥へ突き進む。私は悲鳴をあげながら必死に抵抗した。

「やだっ！ 抜いてっ！」

「だーめ。もうすぐ全部入るから」

紗璦はそう言いながらさらに腰を押し付けた。そしてとうとう最奥まで到達する。

「ふふ、全部入っちゃった」

「いやあつ……！ 抜いてえっ！」

「そんなこと言っても僕の精子が欲しくてたまらないはずだよ」

紗環はそう言うのとゆつくりと動き出した。最初は優しく動かしていたが徐々に動きは激しくなる。激しい動きに膣壁が擦られる。やがて頭が真っ白になる感覚に襲われた。

「あっ!? ああっ!!♡」

「気持ちいいよね? ほら、君の中も僕の子種を欲しがって吸い付いてくる」

紗環はそう言いながら私の乳首を蜘蛛糸を使って摘み上げた。そしてクリトリスにも糸を伸ばす。その瞬間凄まじい快感が襲ってきて頭が真っ白になる。

「はあっ!♡はっ……ああっ!♡」

「そろそろ出そうだよ。僕の子供産んでくれるよね?」

私は必死に首を横に振る。しかし紗環はそれを無視してクリトリスへの攻撃を激しくした。

「ああっ!? だめっ!♡そこ弱いのか!♡」

「知ってるよ。だって君はもう僕のものだから」

紗環はそう言うのと私の乳首を強く摘み上げた。そして同時にクリトリスも強く抓

り上げる。

「ああっ!!」

その瞬間凄まじい快感に襲われて頭が真っ白になる。紗璽はそれを待っていたと言わんばかりに子宮口に精を放った。

「あああああっ!♡」

熱い液体が流れ込んでくる感覚がする。紗璽は最後の一滴まで出し切るように腰を押し付けた。私はそれを搾り取るように秘部を締めつける。

「ふう……これで君は僕の子供を宿したんだよ。良かったね」

紗璽の言葉に私は愕然とする。蜘蛛に孕まされたなんて信じられなかった。

「嘘よ……私は人間よ……!」

「大丈夫。ちゃんと産めるから」

紗璽はそう言うとお腹を撫でる。その手つきは優しく愛しいものに触れているようだった。

「これからは僕と一緒に暮らそうね。僕の子供をたくさん産んで育ててくれる?」  
「嫌っ! 誰があなたなんかの子供を……!」

「ふふ、強情だね。でもすぐに僕のものになるよ」

紗璽はそう言って私にキスをした。そして再び腰を動かし始める。紗璽のものが

再び硬さを取り戻していた。

「やだっ！ もう止めてっ！」

「まだこれからだよ。君は僕のものなんだから」

紗環はそう言いながら私の膣内を蹂躪する。私は再び激しい快楽に襲われていた。

「やだっ！ こんなっ！ ひどいっ！」

「酷くないよ。君はただ気持ち良くなるだけ」

紗環はそう言いながら私のクリトリスに糸を巻きつける。そしてそれを強く引つ張った。その瞬間凄まじい快感に襲われて頭が真っ白になる。

「あっ！♡ああっ！！♡」

「可愛い声で鳴くね。もっと聞かせてよ」

紗環はそう言うときクリトリスへの刺激をさらに強める。私は悲鳴をあげ続けた。

「あああああっ！♡」

紗環はさらに乳首にも糸を伸ばして責め立てる。敏感な部分を全て攻められて私は耐えられなかった。

「ああっ！ もうっ！♡イクうううっ！！♡♡」

秘部から大量の潮を吹き出す。しかしそれでも紗環の動きは止まらなかった。紗環は再び腰の動きを早めていく。そして絶頂を迎えようとしていた。紗環のものが

一際大きくなるのが分かった。

「出すよ！ 受け止めて！」

紗環はそう叫ぶと子宮に大量の精を放った。熱い液体が流れ込んでくる感覚がする。

「いやあっ！ こんなにつ！♡」

私はあまりの量に仰け反りながら絶頂を迎えた。しかし紗環は満足していないのかさらに腰を振り続ける。

「ああっ！ もうっ！♡許してっ！♡」

「ふふ、まだまだ足りないよ。ほらもっと出すからしっかり受け止めて」

紗環はそう言って再び膣内に射精する。その量は先程よりも多くて私はすぐに溢れさせてしまった。それでも紗環は止まらない。

「ふふ、たくさん出したね。でもまだ終わらないよ」

紗環はそう言いながら私から離れた。そして蜘蛛の巣で私を釣り上げたままで笑う。私の秘部からは大量に出された白濁が漏れていた。

私の意識は朦朧としていた。しかしすぐに驚きで私の意識は覚醒する。

「え……何、これ……いやああああっ！」

私の腹部が歪に、どんどんと大きくなっていく。その内側で何かが蠢いているの